

エスノグラフィーの立場から ～教えること (teaching) の臨床社会学～

酒井 朗 (お茶の水女子大学)

1 はじめに

教育科学の質の高さと教育政策へのレリバンスの問題はきわめて重要な課題である。イギリスでもアメリカでもこのことが議論の中心的テーマの1つになっている (イギリスについては、Walford 2002, アメリカならびにアメリカ大陸諸国における議論については、Levinson, et. al (eds.) 2002)。また Walford (2002) は、教育研究の多くが教育政策に対して関連性が低いという批判を D. Hargreaves が指摘しているとも伝えている。今回の課題研究は、今の日本の文脈においてこの課題に取り組もうとするものと言え、たいへん時宜を得たものと言える。

報告では、以下の3点について検討したい

- 1) 学校教育の失敗の解決策を教師の資質向上や品質管理に一方的に求めようとする今日の教育政策の基本的な方向について： 問題の所在を教師に求め、彼らを管理統制することで教育の質的向上を図ろうとする改革案は基本的にずれていると思われる。
- 2) 「教師の社会学」という領域設定の有効性について： 「教師の社会学」という領域設定は、現実の課題にどこまで迫れるだろうか。
- 3) 教育政策に対して、エスノグラフィーはどのような形で影響力を及ぼしうるか： ここではまず教育政策をどう定義するかという議論からスタートする。政策の実行過程までを教育政策の範疇に含めるならば、教師を対象としたエスノグラフィックな研究は、政策研究として成立可能であり、かつ政策そのものへの影響も及ぼしうる。

2. 教師教育改革批判

そもそもの問題は、学校教育の失敗・あるいはそれが抱える様々な問題の解決策を教師の資質向上や品質管理に一方的に求めようとする今日の教育政策の基本方向にある。欧米の多くの国々でそうであるように、戦後の教育改革は、制度や組織面の改善から教師教育の問題へと移行してきた。だが、今日の学校教育がかかえる問題の多くは、消費社会化、情報化に影響された人々の日常の生活意識と学校教育を存立させている基本的モードとの間にあるギャップに由来している。学校はそうした社会変化に対応す

べくその存在様式そのものを変質させずにはいられない。しかし、実際は、その在り方そのものに変更を迫るよりは、担い手の教師に問題を帰し、問題教師をあぶり出すことで対応しようとしている。

教育社会学は学校教育の危機と教師教育改革の関連のさせ方を批判的に検討すべきであるのに、それができていない。その意味では、本部に投げかけられた課題は、いわゆる「教師の社会学」研究者にのみ向けられるべきではなく、学会全体につきつけられた課題である。

3. 「教師の社会学」という領域設定の有効性

学問をどう切り分けるかという問題は、その学問の有効性を規定する。報告者は、種々の教育問題が先に述べたような構図の中で生じているのであれば、教える一学ぶという営為をめぐる教師生徒関係を、それぞれの主体が有する指導観、学習観そしてそれを取り巻く教師文化、生徒文化、その背後にあるマクロ社会の動向を見通した中で分析しなければならないと考える。これは教師の社会学というよりも、「教えること (teaching) の社会学」とでも名付けられよう。教育社会学研究第43集の「教師の社会学」のレビューにおいては、「教師の教育行為」という命名がなされていた。だが、焦点は主体である教師にあるのではなく、行為自体や相互作用過程にあるのであり、それを適切に捉えうる領域設定が求められている。そうすることで、今日の教育改革動向にアカデミックな立場からの批判が適切になされうようになるとと思われる。

4. エスノグラフィーの貢献の可能性

この問題は、教育政策 (policy) という概念をどう定義するかにかかっている。Walford (2002) は、"When policy moves fast, how long can ethnography take?" という論文において、本発表と重なるテーマを議論しているが、そこで彼が議論を整理するために援用しているのが、S. Ball による "policy as text" と "policy as discourse" の概念枠組みである。

多くの社会では、国や地方の政府レベルで文書として政策が立案・制定され、それをもとに各教育委員会、各学校がそれぞれの教育活動を

実行している。"policy as text (テキストとしての政策)"の概念は、文書として記述された政策が、読み手に対して多様な意味合いへと開かれていることを示している。その一方で、Ballは、まさにフーコーが指摘するような意味合いで、言説として作用する政策 (policy) があるという。「そこ (教委や学校) で何をどう論ずべきか、何を検討すべきか、誰がどのようにそこで発言できるのか」についての暗黙の了解など、議論の大枠を規制する言説の存在が認められる。このことをBallは、"policy as discourse"と名付けた。この言説の作用のもとで、テキストとしての政策が、実際にどのように運用されるかが決められていく。

テキストとしての教育政策は、多様な意味合いや矛盾を含んでいるものであり、一旦出来上がったテキストは読み手に対して多様な解釈を許容する。行為主体としての教委や学校はそのテキストを、権力作用を有する言説の作動する場で読み解き、実践へと移していく。

通常は policymaker とはテキストとしての政策を構築する主体をさすが、Ballは、この言説概念を用いるのであれば、末端の現場教師もまた policymaker であるという。

5. "policy as text" とエスノグラフィー

エスノグラフィーとは長期に渡って場に参与することを通じて、その場における文化の記述と理解を目指す研究の総体と定義できる。Walfordはこうした意味でのエスノグラフィーが、"policy as text"に対しては無力であるといい、その理由を2点指摘した。1つはその時間的な長さにある。政策の立案実行評価はきわめて迅速になされるのに、エスノグラフィーは長期に渡るものである。こうしたことは他の教育研究でも生じている問題であるが、エスノグラフィーはとりわけこの問題が顕著である。彼は、もし、エスノグラファーが政策立案に影響を及ぼしたければ、圧縮版の調査を敢行すべきであると述べている。

第二にエスノグラフィックな研究は院生や若手研究者が多く、ある程度確立された研究者がそれを行うことはかなり困難である。教育政策の立案に関わる研究者は経験を積んだ著名な人々であるが、それはエスノグラフィーの担い手と大きく隔たっている。

なお、筆者はこの他に下記のような理由があるとも考えている。すなわち、日本の政策形成上重要な位置をしめる「審議会」には、参画できる教育研究者のタイプが決まっている。1つのタイプは文科省に近いとみなされている研究者であり、もう1つは、構築主義的な意味合い

での「クレームメーカー」としての研究者である。クレームをつけるには、インパクトが大きくなければならないが、そうした研究をエスノグラフィーは生み出しにくい。厚い記述を通じての成果は、読みこむことでその良さが伝わるものが多いからである。

6. "policy as discourse" 研究と臨床的視座

政策を実行に移す過程において、言説がいかに作用するかは、まさにエスノグラフィーが得意とするところである。筆者自身もそうした視点から分析を試みたり (酒井1999)、言説そのものを読み解く作業を行った (酒井1997)。

こうした類の研究が教育政策に影響を及ぼすための1つの方法は、学校現場で政策文書がテキストとしてどう読まれるのかを明らかにし、それを公表して世に問うことである。だが、それは先ほども指摘したような理由で、テキストとしての政策の立案過程へのインパクトとはなりにくい。

筆者が近年試みているのは、現場教師との対話を通じての言説の変革である。つまり、文科省から降りてきたテキストとしての教育政策をどう読むべきか、そして問題への対応策をどう講じるべきかについて、教師たち自身との対話を通じて、支配的な言説を相対化し、新たな言説の構築を目指すことである。このことを筆者は「臨床」の名前で追究している (酒井2002)。それはしばしば、学校関係者との協働的なアクションリサーチとして具体化する。

当日は、筆者が現在あるいは最近着手している (きた) 2つの研究 (事業) を紹介し、筆者なりの現場への関わり方について報告する。1つは、幼小連携に関して、勤務校の附属幼稚園・小学校の教師と行ってきた共同研究である。ここでは、幼小連携とは何かについての定義、カリキュラムの概念を幼小でどう共有するかなどを教員との話し合いを通じて具体化していき、その過程で、たとえば、「環境」概念の再発見等がなされた。

二つ目は不登校研究である。これは、ある自治体との連携事業としてなされているものであるが、筆者は教育委員会担当者との協議の中で、問題は教育相談のネットワークや、小学校と中学校との連携といったシステムの問題として捉える視点を共有し、その点での改善を図ろうとしている。

参考文献 * Levinson, et. al. (eds) 2002, *Ethnography and Education Policy across the Americas*. Westport, CT, Praeger Publishers.

* Walford, G., "When policy moves fast, how long can ethnography take?" (同上書所収) ほか